

狭衣物語の草子地

— 諸本間における表現主体の位置 —

久 下 晴 康

—

狭衣物語の草子地について考えをすすめてゆくには、源氏物語の草子地についての諸考察を参考に供しながらゆくことが手がかりにならう。というのは、狭衣の古注釈書『下紐』等における草子地言及への稀薄さもさることながら、狭衣物語の草子地に関しても影響論と同様に源氏物語の延長線上でまず捉らえてみるのがかなり明確な検討につながるだろうと思うからである。例えば源氏物語夢浮橋の巻末は、青表紙本系でも大きく二分されて「とぞ」で終わるものと「とぞ本にはべ(る)める」でくくられるものがある。いまこれについて『蝦江入楚』で古注を引くと、

〔秘〕 紫式部一部、我身の書たるといふをしらせじとて、むさ／＼と、夢や何やのやうにて書て、擬本にかやうの事有るといへる心なり。かやうにして、行末を限り、見はてぬ夢のさま、甚深微妙の趣句とみえたり。

〔箋〕 是は、一部を我はかゝぬと、式部が見せたる詞也。本

にあるを写したるよし也。但此詞有は異本也。され共、此詞を説たる吉也。おどし置給へるならひにとぞと有は、書さしたる様也。本に侍るめるは、一部の通りたるになる也云々。

〔秘〕とあるのは『細流抄』、〔箋〕は三条西実枝(三光院)説である。どちらも「とぞ本にはべ(る)める」の方を評価していて、少なくともこの書きぶりを書写者の注記とは見なしてなく、作者紫式部の筆としているのである。同様な狭衣物語の結末は後述することとして、この点をまず作者の虚構の方法として認めれば、聞き手を眼前に設定してあくまで〈語り〉の姿勢をとらうとするためか。それとも作者主体の韜晦の一つとして書写者の位置へ雲隠れてしまふ体を示しているかであらう。では何故作者はそのような姿勢をとる必要があったのかということである。それがいわば物語としての本性ということに関わつてこよう。つまり〈書く〉という営為が〈語る〉行為に比して孤立閉鎖的で、それが物語の本性に背反する。仮構された事実を〈語る〉虚体と〈書く〉実体とが、作者内部の狭間で同化、融合することによって初めて文字

化された「物語」として享受者に開かれた機能を獲得すると言えよう。だから玉上琢弥氏の物語音読論が「三人の作者」を表現から抽出してそれと対置させるが如くに享受する姫君を設定したことは一面では首肯されるのだが、そのために変幻自在な作者を捕捉できない状況においつめたことは、むしろ「物語」の両義性の片方を欠落させてしまったのではなからうか。草子地を作者側からみるか、享受者側からみるかという分岐点に立たされているわけであるが、如上のごとく一方に帰着できるものではなからう。

草子地は、語り手（作者）と聞き手（読者）との間で物語的空間を創造する技法である。まさに二人がかりの作業なのである。地の文全体にまで押し込められてゆく気配の草子地も物語の本性をそのまま抱え込んでいと言わねばなるまい。ただ小稿の主眼は、享受論ではないから、草子地記述の目的や効果を特に対読者意識としてまとめた言及はしないが、一応次に草子地自体の定義めいたことを言っておけば、

作者がその変容として、物語に多様の重層的にかかわりをもつ表現主体を措定して、そこから表出されたことば

というのが筆者の限度である。この点から以下の考察をこころみてみよう。

二

源氏物語の成立情況と狭衣物語のそれとが等しかったとは言いが、草子地も各々の形成をみせているはずであろうが、その連続的な一面をとらえる証左の例一がきわめて狭衣物語の源氏志向

を明らかにしている。―例一―

花のいたう散りかかるを見給ひて、（巻）桃李先散りて後なるは深し」と忍びやかに口ずさみ給ひて、勾欄にをしかかり給へるまみ気色・御声などは、かの「桜は避きて」とて、花の下にやすらひ給へりし御様を、その折は見しかど、この御有様、又類なげにぞ、何事の折節も見ゆる。（巻四・360べ）⁽³⁾

引用文は三谷栄一氏の分類に従って言えば、第一類の大系本からであるが、他の系統にしても語句の出入りは多少あるもののみな同様の本文をもっている。

この場面は、斎院（源氏宮）のもとで催された蹴鞠に狭衣大将が誘われ、居合せる女房達から夕霧大将と比較されるのを嫌って、その場はただ詩を朗詠したにとどまっている。その時の優美な狭衣の姿態を把らえた語り手は、若菜上巻で柏木が「桜は避きて」という六条院の蹴鞠の折に言った言葉を引き合いに出しながら、実際の見聞者としての位置を「その折は見しかど」によって披露し、いままた狭衣大将を間近に目撃しているという。物語がいかに事実を伝えるに巧みになるかを、狭衣物語の作者は六条院に伺候していた古女房を語り手にしたてて実証しているようにして

「物語」の祖型がここに見られるわけだが、同時に筆録者も重なり合っていることに気づきたい。体験談として語ることと書くことが平行して作者主体の内部にうごめく。その映像の再現が、例二はいささか距離をおいて傍観者の位置からなされているよう。巻一で最も異文の多い箇所として知られる宮中での狭衣の横

笛による天稚御子降下の段の直後、その事情を急ぎ父堀川大殿に知らせるくだりである。―例二―

(1)伊予の守それがし、参りて「内にしかじかの事候ふなる」と申すを、聞かせ給ひて、御心地どもいかにばかりかはありけん。更に現の事とも思え給はず。「明暮ながらへて見るべきもの」とも、(思されねば、この世の人とも思え給はず、「さればこそあさましく」「われいかにせん」と、二所して臥しまろび給うを、見たてまつる人々の心地、思ひやるべし。殿は、されど内に参り給ひて、「ありつらん有様をも聞き、ゐたまひつらん跡をも今一度見てこそは、いかにも身をなさめ」と、さかしく思して、御装束などし給うも、はかばかしうも立たれ給はず、倒れまろびつゝ、出で立ち給うさま、いといみじ。母宮もたゞ御衣をひきかづきて臥し給ひぬる、さらに息をだにし給はず、昇りはて給はば、世は乱れはてぬるなんめりと見えたる、御けしきどもなるべし。殿の内には、「いかになりぬる世ぞ」と見えたり。御車にて、道も見え給はず、御車副なども参りあへず、乱りがはしき世の有様なり。道すがら昇りはて給ひなん、跡を見んことよ、明日まで世にありなんや」と思し続けらるるに、御車の中よりも流れ出でぬべし。

(48 べ)

(2)伊予守さだなりの朝臣参りて、「内裏には中将殿、御前にて笛遊ばしけるに、天稚御子あまたの天人率ゐて迎へに待るなる」と申すに、聞かせ給ふ御心地、いかにありけん。更に物もおぼえ給はず「ただ名残りの空をだに見む」と、「ゐ給へ

りつらむ跡だに今一度見ん」とおぼして御装束など、かたのやうにして出でさせ給ふを、母宮は御衣ひきかづきてふさせ給ひぬるままに、「昇りはて給ひなば、世は乱れぬべきなめり」と見えたる御気色どもなり。御車にても道も見え給はず、御車添、御前駆ども参りもあへず、乱りがはしき世の有様なり。道すがら「昇りはて給ひなん跡を見ん心地よ。明日まで世にありなんや」などおぼし続けらるるに、千曲の川渡り給へる御車とて見えて、御涙は流れ出でたり。(101 べ)

(3)伊予守なにがしの朝臣参りて、「内裏にかうかうの事なむ候ふなると申すを、聞き給ふ御心地ども、いかにばかりかはありけむ。さらに現の事とも思されねば、「居給へりつらむ跡をだに今一度見む」と宣ふ事より外に物もおぼえ給はぬを見給ふに、母宮はただ御衣引き被きてぞ臥し給へる。世はいかになりぬるぞと見ゆるまで殿の内騒ぎたり。道の程思し続くるもいみじうゆゆしきに、御車の内より流れ出づる御涙、千曲の川渡り給ひけるにやと見えたり。(206 べ)

(4)伊予守なにがしの朝臣参りて、「内にかかる事なん候ひける」と申すを聞かせ給ふ御心地ども、いかにありけん。更に現の事とおぼされぬに、「昇り給へる跡だにみん」との給ふよりほかにもいはれ給はぬ御心地ながら、御装束などかたのやうにし給ひいで給ひぬるを見給ひて、宮は御衣ひきかづきてぞ臥し給ひぬる。世の中はいかになりぬるぞと見ゆるまで殿の内騒ぎなる。ごぜん御車添なども参りあへず。乱りがはしき世の御有様なりかし。道の程おぼし続くるもいみじ。

御車のうちより流れ出づる御涙も千曲の川になりぬく見えたり。(33ペ)

諸本間の異同を容易に判断するには、第一類にのみ草子地「見たてまつる人々の心地、思ひやるべし。」があつてその他にはないこと。第二類では伊予守が傍点を付した「さだなり」と固有名詞となり、天稚御子降下の事が口上で明らかにされていること。同じく傍点をつけた「千曲の川」が第二・三・四類にあつて第一類には見えないことによつて可能とならう。この單純な指摘によつても第二類が他に比して特異な存在であることがわかるが、だからといつてそれが改作者の手によつてゐるとは限らない。むしろ第二・三・四類が一つの傾向のもとに派生してゐることを注意すべきであつて、この場合第一類の描写と対立を生じてゐるのである。そこでいま少し後半の部分を見ていくと、第一類の「御車にて道も見え給はず」以下「と思し続けらるるに」までが、第二類ではほぼ同文になつていて、その部分の第四類が「道すがら、昇りはて給ひなん跡を見んこと(心地)よ。明日まで世にありなんや」を欠いて、代わりに「道の程おぼし続くるもいみじ」が加わつて、それが第三類からの影響とすれば、第二・四類はその程度や趣向は多少異なるものの混應の形を示していることになり、結局は第一類と第三類との対立関係とならう。このことはまた狭衣物語の全体的な対立関係に敷衍できるのである。

では、この二者間の草子地と表現主体の相違といふことになるが、第一類の傍観者は物語現実から一步退いたことによつて「御心地どいにかばかりかはありけん。」と、発し得る話主になつて、

客観的にこの場の状況を見据える立場に所を得、それを三つの「べし」が支えることになるが、そのために直接「見る」主体との間で分裂をきたしてゐるとも言えるのである。この疑問推量の草子地はおそらく狭衣の両親の驚愕の甚しきを言い表わすことがその役割で、享受者に想像を委ねて物語の展開を次へと押し進めていくのであつて、「見たてまつる人々の心地、思ひやるべし。」もすばやく同調を求めて省略してゐるので、逆に青山克弥氏が指摘されたように、享受者に対し物語現実への参加を要請する、語り手の積極的な「働きかけ」ではあらうが、これはたぶん音読者の中断ではなからう。視線が遠近二重になつてこの場に接してゐただけなのである。つまり、物語現実から多少隔たった位置をとる話主は、享受者と位相は異なるが、物語場面に對する距離としてはちやうど等しい関係に立つことができ、かえつてその結果享受者を包容する効果をもつようである。ところが、第三類では疑問推量の草子地を除いて「見る」姿勢を貫き通してゐると言え、それが第一類の「見たてまつる人々」すなわち女房の一員としての立場を定めてゐるように思われる。ただし堀川大殿にともなつて視点も移動し、その全知的な有様がうかがわれるのである。

冷静な傍観者の位置で統一させることは、まとまつた文構成を呈呈することになるが、物語空間としてはしりすばりになつていく感がぬぐいきれない。ただこの項で確認しておきたいことは、第一類に對して第三類が、傍観者なり見聞者なりの位置をどの程度徹底させてゐるかである。

次に掲げる例三は、まだ源氏宮が堀川邸にゐる頃、狭衣が『在

五中将の日記』にことよせてはじめてその恋情を打ち明けるが、源氏宮は兄妹として接していた今までの意外さに怖れるばかりで、彼の告白も一方的な泣き落しに終わっている条の後半である。―例三―

- (1)人近く参れば絵に紛らはして、(羨)退き給ひぬ。(巻一・57ペ)
(2)見苦しげならん気色も知るかるべければ、立ちのき給ふ。中々いみじき御心まどひなるや。(羨)今よりはいとどいかに憎ま
せ給はんずらん。あまりいちじるしからん御心変りも中々人
目いかが侍らん。思しうとませ給ふな。よし御覧ぜよ。かば
かり聞こへさせ侍れば世に侍らじ」と言ふ言ふ立ち出で給ふ
指貫のすそさあやぬるらんあまりてみ多給ふ気色なり。(巻
一・142ペ)

- (3)人近く参る気色なれば、少し退きて(羨)今よりはいかに憎ま
せたまはむずらむな。俄ならむ御心変りは、中々人目あやし
く侍らむ。思し疎むなよ。岩切り通し侍るとも、おとぎきも
あるまじき事と思ひ侘び侍りなば、よも見苦しき心の程は御覧
ぜられじ。余りに思ひ侘び侍りなば、通はぬ里にぞ行き隠れ
侍らむかし。さやうならむ折は、さぞかしと思し召し出でさ
せ給へかしとてなむ」など、聞え知らせ給ふ事ども思ひやる
べし。されど、いと近くしも侍はぬ人は、いつもけちかき御
仲らひに、目も立たぬならむかし。「絵見侍らむ」とて人々近
く参れば……(巻一・214 215ペ)
- (4)人近く参る気色なれば、少しのきぬ。「今よりはかく憎ませ給
はんずらん。俄ならん御心変りは、中々人目あやしう侍る

に、うとませ給ふなよ。岩切り通し侍り、くるしき心のはどは
御覧じ、余り思ひ侘び侍りなば、通はぬ里に行き隠れ侍りな
ん。さやうならん折、さぞかしとも思し出でさせ給へかしと
てなんなど、聞え知らせさせ給ふ事ども思ひやるべし。され
ど、いと近く侍はぬ人は、いつもけちかき御仲らひに、目立た
ぬなめりかし。「絵見侍らん」とて人々いまい少し近く……(巻一・
45 46ペ)

第一類は引用文が短いが記事の相違もあって「人近く(ふ)参る
(れ)云々」以下を基準に示したわけだが、第三・四類にのみ共通
した草子地があることに変わりはない。その中で「思ひやるべ
し。」までは、狭衣に同情的な心情を享受者に求めたものであっ
て、「されど」以下の作中人物を対象化した批判的な言辞とは異
なっている。もちろんここで問題にしたいのは後半である。語り
手は、主人公達に近侍している者として他の女房達とは違った体
験をする。いつも兄妹として仲のよい二人の間に異常な事態が起
こったことを知っていたのは語り手一人だけだという。それがこ
の草子地で、女房達への非難として「目も立たぬならむかし」を
考えるよりも、語り手の自負ととれようか。またこれは、狭衣物
語の冒頭の草子地でこの物語のモチーフともなる「今始めたる事
にはあらねど、猶世の中にさらでもありぬべかりける事は、余り
よろづ勝れ給へらむ女の御あたりに、実の御兄ならざらむ男は、
いみじうとも睦まじうこそ生し立て給ふまじきわざなりけれ。」
(全書巻一・187ペ)に関連して、語り手の見聞者としての位置が
第三・四類には強く打出されていることが知られよう。そのため

に第一・二類にこの直後いわば「人近ふ参れば」の人として登場してゐる大納言の乳母は、源氏宮の乳母としてこの異常な事態にすばやく気づかなければならない立場の者だが、第三・四類では不必要になつて消去され、その代わり実体化されない女房として全てを見通すことのできる語り手の視線があつたことになる。

同様な観点から例四を示そう。源氏宮と母宮が暮をうつてゐる所へ狭衣が近寄つてきて、母宮と話しをはじめる。第一・二類では話題が源氏宮のことになつたところで、狭衣が自身の源氏宮を恋慕う気持は蟬のように声を立てて鳴かないからといつて劣つてゐるはずはないという意味の歌を詠んだのに続く文である。

例四

(1) 蟬黄葉に鳴きて漢宮秋なり」と忍びやかに誦し給ふ御声、
珍しからん事のやうに猶身にしみて、「珍しうめでたし」と若き人々の心の中ども、いかでかは思はざらん。(巻一・79ペ)

(2) 蟬鳴く黄葉にきて漢宮秋なり」など、口ずさみながめ給へる気色、荒る夷も泣きぬべし。(巻一・238ペ)

(3) 蟬黄葉に鳴いて漢宮秋なり」と忍びやかにうち誦し給ふ御声、珍らしげなき事なれど、若き人々は死に返りめでたしと思ひたる、ことわりなり。(巻一・239ペ)

(4) 蟬黄葉に鳴いて漢宮秋なり」と、いとあはれげなるよなど、いと忍びやかに誦し給ふ御声、珍しからんことのやうに、若き人々はしみかへりめでたしと思ひたるも、ことわりなり。(巻

一・78 79 ペ)

第二類は歌とこの和漢朗詠集にも所載されている詩との間に異文

があり、また「荒る夷も泣きぬべし。」に相当する語を他の類の前後の箇所に見出すことができるので、考察の外にしておく。歌の詞が側近くに侍している女房達にはっきりと聞きとられたかどうかは、この場合本文の評価に繫つていくことなので断定はできないが、おそらく狭衣は恋情を抑えかねて口の端をついて吐露してしまつたので、それを知られるのを恐れて言い紛らすためにただの叙景的なこの詩を微かにでもはつきりと聞こえるように衆目を偽る声に切り替えたのであらう。第三類の「珍らしげなき事」を全書本の頭注は「詩の文句」とするが、それは狭衣の声の素晴しさであるとするのが適切ではなからうか。第一・四類が若い女房達にとって「珍しからん事」としてゆくのに対し、「珍らしげなき事」とするのはいったい誰なのであらう。語り手は近侍する女房として選ばれ影のように存在している。特に第三類では見聞者として常に狭衣を見守つてその一挙手をも見落とすことがないのである。その見聞者にとつて彼の優艶な声を耳にするのも日常茶飯のことであるにちがいない。「珍らしげなき事」にはそのような語り手の得意げな面ざしが感じられはしまいか。その上、女房達の感激している心中を忖度して「ことわりなり」とするのは、第一類の「いかでかは思はざらん」に比べて、強い同意を求める措辞として見下した語り手の姿勢がうかがわれよう。そのいかにも高姿勢であることは、全書本で詳細に調べられた藤井久子氏も指摘されていることである。

右のようなことは、作者側の問題として、いずれかに改作の筆が多く入つてゐると思われるが、ともかく若い女房を視野に入れ

ていることは、この物語が女房文学として構成されている一つの要素になることで、あわせて享受層との関連で考えるべき事柄であるが、いまはこれ以上述べることはできない。ただ同じような見解をもてる例を次にも挙げるのだが、論は物語における「書く」ことに移ってゆく。

三

語り手が見聞者であり同時に筆録者も兼ねているとき、その物語は事実譚としての信憑性が一段と増すことになる。狭衣物語は「この頃」の出来事として聞き手を魅了し、源氏物語の世界をも実際に垣間見た語り手によって、それに遜色のない世界が存在していることを強調する。あえて言えば、それが現実の六条斎院の世界に重ね合わされるということになるのであるが、物語の源氏宮も斎院に卜定されるので、その折の作法や儀式は六条祓子内親王園の女房達には周知のことであって、事改めて物語にその模様を叙述する必要もなく、そのような場合たびたび省略の草子地となって現われてくるわけで、狭衣物語の有効な技巧と言えよう。例えば儀式作法に関する省略の草子地は、「祭の日の事ども例の事なり。」（大系巻三・305べ）とか「御湯殿の儀式有様、九日の夜までの御産養ひども、書き続けずとも思ひやるべし。」（大系巻四・306べ）をはじめとして、おおよそ十六例あり、多少言い方は異なるところもあるが諸系統に省筆してある箇所は共通している。ただこのことで注意しておかねばならないのは、改作者といえども原作に省略してある記事を補うだけの見識はなからうから、いき

おい原作の省略に従ってしまうことも考えられて、改作者にとって都合のよい隠れ蓑になってしまいうわけで、これによって作者（改作者）の位置を安易に定めることを慎まなければならない理由が狭衣物語にはあるという点である。

とにかく、物語に「書かない」という断わり書きを書くことによって、逆説的に物語が書かれたものであることを証していく草子地として、表現主体が「物語」に臨む姿勢を見ようと思う。次に掲出する例五は先の十六例中に数え入れなかったのだが、巻三における賀茂の祭の当日の様子で、斎院にとどまった若上達部と牛車内の女房達の間で時鳥を題材に一晚中和歌の贈答があいついだ、その折の歌を省くというのである。――例五――

(1) 若上達部などは土の上にかたのやうなる御座ばかりにて、夜もすがら女房どもと物語しつつ、明くるも知らぬさまなり。京にはまだ音せざりつる郭公も御垣の中には声馴れにけり。内も外も耳とめぬは、いかでかあらん。いとおかしき歌ども多かりけれど、え書きとどめず。（306べ）

(2) いづれの殿上人・上達部などは、あんの上、かたのやうなる御座ばかりにて、女房たちと物語しつつ、明くるも知らぬさまなり。都にはまだ音もせざりつる郭公も御垣のわたりには声馴れにけり。内も外も耳とどめぬ人は、いかでかあらん。言ひ亦はすことも多くあるべし。みなは、え書きとどめずなりにけり。（96べ）

(3) 若上達部などは、土の上のかたの様な御座ばかりにて、夜もすがら女房たちと物語しつつ、明くるも知らぬ様なに、

京には音も無かりつる時鳥も、斎垣^{いがき}のわたりには声馴れにけり。若き人々の耳とどめぬはいかでかはあらん。内にも外にも言ひ交はす言どもあるべし。されど、一人二人が言ならばこそ書きもとどめ、皆ながらはうるさければとどめつ。(112べ)

(4) 若上達部などは、土の上にかたの様なる御座ばかりにて、夜もすがら女房達など物語しつつ、明くるも知らず顔なるに、京にはまだ音せざりつる郭公も、御垣のうちは声馴れにけり。若き人々の内も外も見えとどめぬは、いかでかはあらん。いとおかしきかたども多かりけれど、うるさければ、え書きとどめずなりにけり。(157べ)

草子地の部分に限ってみても、第二・四類が第一・三類との混合文でできていることは、第一類の「おかしき」「え書きとどめず」、第三類の「若き人々」「言ひ交はす言」「うるさければ」の語句に着目すれば、容易に気づかれることと思う。ここでもやはり第一類と第三類との対立についてみていこう。

第一類は若上達部と女房達との間に取交わされた歌に少なからぬ関心を寄せて、それらの中には趣のある歌が多いが残念ながら書きとどめることができないという書きぶりであらうし、第三類は多少語を弄して「一人二人が言ならばこそ書きもとどめ、皆ながらはうるさければとどめつ。」としているところに幾分でも筆録者の姿勢の差がでよう。この「うるさければ」という言辭は、中野幸一氏の分類用語で言えは⁽⁶⁾煩雜⁽⁷⁾の理由付省略を指示して、宇津保物語を例外にして、他の物語でもこのような場合省筆する

のが当然であるのだが、せっかく第一類が提供しようとした共時の物語的場あるいは物語的空間を無にしていた第三類の筆録者は、書く意識を見せびらかしながら⁽⁸⁾「皆」の中に含まれる大部分の享受者である仲間の女房達の歌をこのような措辭で葬り去ったことは、狭衣物語にとってまず大過なことであるにちがいないからう。

物語の主題には直接関わりのない儀式作法の有様を詳述するのは煩わしく展開を妨げるからといってそれを全て省くようなことにでもなれば、やはり物語への興味は薄れてしまうだろう。その折の女房達の衣装などについても言い及ぶのは一見無駄なような叙述とも思えるが、享受層の中心である彼女達の関心の的がこの辺に少なからず寄せられていたかもしれないのである。そこで例五に続いて引用するのは、この直前の記述で斎院(源氏宮)が御輿の日になって賀茂の本院に赴く折、それに伴う上臈女房の装束についてその取り合わせの色柄の優美さを記した後の文である。

—例六—

(1) 書き続けたるは見所なく、「こや、いみじかりける」とて、笑はれぬべけれども、その折、車ひきつづけられたりしは、常よりも見所こよなかりける。(何の色も、言ひ続けたるよりは、染・張からに清げにもあるぞかし。)同じ織物、うすもの、打物などいへど、殊の外に同じ人のしわざとも見えすこそあれ。(303べ)

(2) 書き続けたるは見所なく、「これやいみじかりける」とて、もどき笑ふ人もありぬべけれども、その折、車引きつづけら

れたりしは、猶世の常の年よりは見所こよなかりけり。同じあや織物、打物などいへど、ことの外に同じ人のしわざとも見えずこそあれ。(93へ)

(3)言葉に書き続けたるは、いと見所無う「これやいみじかりける」とて、もどき笑はれぬべけれど、その折、車引き続けられたりしは、なほ「常よりは見所こよなし」とぞありし。何色も、言ひ続けたるよりは、染柄清げにぞあるかし。同じき綾織物・打物などいへど、清らはことの外に、「同じ者のしわざとも見えず」とこそはあれば、かく書き続けたるよりは、「見るはめでたくこそはありけめ」と思ひやるべし。(108へ)

(4)書き続けたるは、いと見所なく、「こや、いみじかりける」とて、もどき笑はれぬべかりけれど、その折車引きいでたりしは、見所こよなかりけり。(151へ)

「こや、いみじかりける」とは筆不足を非難する読者を警戒して、筆録者の謙遜が言わせた辞であらうが、言葉で描くにはすばらしいものはすばらしいと言っていく外ないという語気もあるう。そのところを回避するかのような書き方をしているのが第三類の筆録者なのである。「なほ『常よりは見所こよなし』とぞありし。」「とぞありし」とは、いったい何所にあったのであらうか。単に見こたえがあったとしているのではなからう。見たことを筆録している体ではあるうが、その光景を見て「見所こよなし」としたのは、はたして第三類の筆録者であらうか。

ところで、源氏物語には複数の語り手の存在が知られている。すなわち、帯木巻の冒頭の草子地は、光源氏の内密な色事の話ま

で公にして好色者の一人に仕立て上げてしまおうと目論む語り手に対して、彼に正当な評価を与えるべきだとする語り手の詞であり、これは夕顔巻巻末の草子地と対応しており、また、竹河巻の冒頭にも玉髪方と紫上方の女房達の語り伝えた話の真偽を問うた草子地をもっている。《物語》の真相を究明するかのような作者の執り成しは、全知超越的な視座をあえて廃して各人各様の見聞・伝聞の介在を確認しながらその統合体としての《物語》を完成自立させていく構造をもつていようが、広大な時空を支えもつ源氏物語と、内省的な貴公子の一代を描く狭衣物語では、もちろん複数の語り手の虚構化という手の組んだ物語の事実化を構想するわけもなからう。

しかし、狭衣物語も近時の実録であるという体裁をとっている限り、斎院の晴れ姿を目撃して筆録する者、いわば物語製作の当事者として参画している者が一人だけだと言うことはできない。それが盛儀として衆目の集中する場面であればなおさらのことである。このような場合、第三類の狭衣物語に二人の筆録者がいても不思議ではなからう。一人はその光景を「常よりは見所こよなし」とか「同じ者のしわざとも見えず」と書きしるすわけだが、第三類の筆録者は、このように書き続けてしまうよりも、「実際に見る方がどんなにすばらしかったことでしょうね」と書くべきだと主張し、あとは読者の想像に委ねてしまっているのである。ところが、一方の筆録者というのは、実は第一類(第二類)の筆録者であったことが、「常よりも見所こよなかりける」「同じ人のしわざとも見えず」と引用文中に同じく見出されることによって

知られるわけで、「とぞありし」とは第一類の本文にあったことになり、さらにこのことで、第一類の本文が第三類以前に形成されていたことが自然と証明されてしまったことになりかねないのである。ではなぜ第三類の筆録者は第一類の本文を引用したのであるうか。それはやはり、第三類の筆録者こそが、主人公達に最も近く仕えていた者であることを誇示するためだろうと、高姿勢な表現の前述の例三・四からも考え合わせられるのである。この第三類のように見聞者・筆録者としての位置から一貫して表現することは、事実の「物語」としてある確信を与える一つの方法になろう。当時の享受者には、語り手あるいは物語本文の前後関係よりも、どれ程主人公達の世界に接近できるかが最大の関心事としてあったように考えられる。

四

草子地の第一類と第三類との対立から、作者の変容がきわめて異彩を放つことになってきたが、最後に物語の結末に焦点をあてて、第三類がいかにかその姿勢と位置を貫き通し得たかを見ておこうと思う。次は、巻一から巻四までの巻末を引用してある。

―例七―

(巻一)

- (1)人のけはひすれば、「落ち入りなん」とて、海の底をのぞくも、ただかばかりにてだに、いと恐ろしきに……(以下完全ニ増補)……とて出でぬ。(116 べ)
- (2)海をのぞくもただかばかりにてだにいと恐ろしきにわななく

／＼なき入りてうつぶし給へり。(400 べ)

- (3)人のけはひすれば、疾う陥りなむとて、海をのぞく。いみじう恐ろしとぞ。(278 べ)

- (4)人のけはひすれば、とく陥りなんとて、海をのぞくに、いみじく恐ろしとなん。(137 べ)

(巻二)

- (1)「行方聞かせ給へ」と数珠押しすり給ふ。験もいかが。(214 べ)
- (2)仏にも「この行方を確かに聞かせ給へ」とおぼし入りて数珠押しもみたまへるは、験待なんとぞ侍る。
- (3)仏にも「この行方確かに聞かせ給へ」と数珠押しすり給ふ。験如何とぞ。(385 べ)

- (4)仏にもこの行方知らせさせ給へ、と数珠押しもみ給ふとなん。

(298 べ)

(巻三)

- (1)引き返さるる心地し給ふとぞ。(337 べ)

- (2)脱デナシ

- (3)引き返さるる心地し給ひけりとぞ。(147 べ)

- (4)引き返さるる心地し給ひけるとぞ。(212 べ)

(巻四)

- (1)世と共に物をのみ思して過ぎぬるこそ、いかなりける前の世の契りにか、と見え給ふれと。あはれにもをかしくも、若き身の上にて思ひしみにける事どもをぞ、片端も書き置きためる。……(中略)……男も女も心深きことは、この物語に侍るとぞ本に。(467 べ)

(2)世と共に物をのみ思しつくして過ぎぬるこそ、いかなりける
前の世の契りにかと見え給へれと。あはれにもをかしくも我
身の上にて思ひしみにける事どもを、片端も書きたんめる、
……(中略)……男も女も深き心ばかりは、この物語に侍る
とぞ本には見え侍りける。(125べ)

(3)世と共に物をのみ思して過ぎ給ひぬるこそ、いかなりける前
の世の契りにかとこそ見え給へれ。(293べ)

(4)世と共に物をのみ思しつくして過ぎぬるこそ、いかなりける
前の世の御契りかと見え給ふめれとなん。女の人みなあはれ
にをかしくもみける事ぞと、かたはらに思ひ給ふめれど……
(中略)……男も女も心深き事ばかりは、この物語に侍るめり
とぞ本には侍るめる。(212べ)

一瞥して知られるように、第三類の巻一から巻三までの巻末は、
すべて伝達の草子地である「とぞ」に統一されていて、他の類が
全く不揃いであることと一線を画している。だから、巻四の結
末が問題になるわけである。第一類で言えは、「あはれにもをかし
くも」以下の草子地が、第三類には欠失していることである。
欠失したものと判断するか、それが原形なのか早急な結論は慎む
べきかもしれないが、巻一から巻三までの巻末に「とぞ」と明記
している第三類が、巻四の物語の結末に限って、その統一を破っ
ているのはどうも腑に落ちないことであり、なおかつその最後が
「見え給へれ」で終わっていることである。

第三類の「とぞ」の下にどのような語の省略があるかを考えて
みると、「言ひ伝へたる」とか「本に侍る」では、第三類の基調

からすれば似合わないようで、単に「侍る」あたりが穏当な補足
であろうと思われる。「ということでございます。」これは、語り
手が一つの巻を話し終えた時の、ことばとして相応しかろう。物語
の最後の場面では、帝にまで榮達したのにも拘らず恋の不如意の
ため憂愁に付む主人公を捉らえる語り手の言葉として、引用はも
う少し前の部分からすべきだったかもしれないが、とにかく「見
え給へれ」までは解釈できよう。「どのような前世からの宿縁で
あろうかとお見えになりました。」とただ一人主人公に付き添っ
て付度する語り手。いわばこの言辭は、近侍する見聞者として発
言しているわけで、そのような主人公の姿を写し出すことが一つの
テーマであってみれば、これをもって狭衣物語の綴目とするに
値するとも考えられるのである。その事がむしろ第三類の作者に
とって意図するものであり、逆に以下に述べられる他類の草子地
に含まれる謙辭と、少なくとも「本に」と共通してある、書写者
の位置に後退してしまう語は、不本意であったかもしれないの
である。ともかく第三類の作者の意図的な処置ということになれ
ばこのように考えられよう。

では、他類の「あはれにもをかしくも」以下に記される作者の
詞、いまはその内容に立ち入る余裕はないから、特に最後の「本
に(侍る)」についてももう少し言い足しておくと、本稿の最初に指
摘した如く、源氏物語の古注ではこれを後人の書き入れとは見て
いないのであって、狭衣物語の場合も、作者の輜晦と考える方が
適しているように思う。ゆえに、原作の本文にも本来最後に、作
者の跋文が存在していたのであろう。因に、第三類流布本の巻四

は、第一類の本文であると三谷榮一氏は指摘されているが、この結末の箇所に関しては言及されていない。

* * *

表現主体の位置といってもその中心を見聞者・筆録者に見定めため、作者の多様な変容として草子地を把握するまでには至らなかったろう。しかし、第一類と第三類との対照によって、改作者の改変が草子地にも顕著に現われてくることは指摘できたと思う。ただこの二者の関係を強調するあまり、第二・四類の性格を混同本としていっしょに言ってしまったが、第二類に関しては別の観点から性格づけを検討する必要があるのは言うまでもない。

ともかく、第一類と第三類との本文は対立といっても拮抗であり、どちらが原作本文に近い関係にあるかを、小稿の論点に関して問えば、作者圈との問題とも絡み合ってくるのは自然の成り行きであった。六条斎院で催された天喜三年五月の物語歌合は、多くの物語創作の力量に富む女房達の存在を知らしめている資料であり、寛子・祐子・禊子三宮家の融和な物語交歓の場面を設定し、彼女等を読者とするような状況に、狭衣物語第三類の作者の表出を置いてみたら、それが有効かどうかは自ら明らかなことだろう

■ 新刊紹介 ■

復本一郎著『芭蕉の美意識』

著者の「芭蕉における「さび」の構造」(塙書房刊)につぐ第二論文集。前著以後の論文を網羅して、一、無常―肯定された

と思う。だがしかし、一方で流布本本文の優位を説く論者もいて、筆者はそれらに謙虚に耳を傾けるつもりである。拙稿はあくまで草子地に関して一つの読みとり方を示しているのであって、全体的な評価位置づけは、まだ先の事としておきたい。

注(1)『国文学詮釈叢書』に拠る。

(2)『源氏物語研究』

(3) 便宜上その呼称に従って、以下第二類が巻一のみを為家本(校本)、巻二以下を九条家旧藏本(未刊国文資料)から、第三類が全書本から、第四類が蓮空本(古典文庫)から引用する。引用文上の番号は順次各類を示し、傍線は草子地とする筆者が付したものである。ただし例六は全文草子地と思われるので傍線を除いてある。

(4)『狭衣物語における不定な表現について』(金沢大学国語国文昭42・3)

(5)『狭衣物語研究―草子地を中心に―』(国語国文学研究昭48・2)

(6)『源氏物語における草子地』(『源氏物語講座第一巻』)

(7)『狭衣物語巻四における諸伝本の基礎的研究』(実践女子大学紀要昭37・3)

(8)落合璋子氏『狭衣物語の本文とその展開―巻二を中心として―』(国語国文昭38・17)

松尾聰氏『狭衣物語などの『もこそ』』(国語展望昭53・2)

「無常迅速」、二、笑い―『古今集』俳諧

歌の受容、三、さび―俊成・西行の受容、

四、艶―「さび」の評価と「恋」の評価、

五、位―「去来抄」の「位」論の検討、

六、かるみ―「俳諧深川」の世界、七、あだ―伊賀連衆の美付、「猿を聴く」考

他を収録している。著者の一貫した姿勢は、俳文芸の世界から芭蕉の美意識や俳諧性を、資料に基づき出来る限り客観的に追求することにあり、それがこうした成果として示されていることは、大いに評価すべきであろう。(昭54・4 古川書房刊 一、四〇〇円)